



Title	公益社団法人アジア協会アジア友の会 (JAFS)
Author(s)	熱田, 典子
Citation	目で見るWHO. 2024, 90, p. 10-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/99619
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

公益社団法人アジア協会アジア友の会 (JAFC)



公益社団法人アジア協会アジア友の会(JAFC)
熱田 典子 (あつた のりこ)

1991年にJAFCのボランティアとしてネパールに栄養調査を行い、1992年より海外ワーカーとしてネパールで活動。その後職員として入職。現在、事務局長代行、ネパール事務所所長。

アジア協会アジア友の会 (JAFC) とは

アジア協会アジア友の会 (JAFC : Japan Asian Association & Asian Friendship Society) は、1979年に創設者である村上公彦が「インドに井戸を贈ろう」をスローガンとして、大阪で市民活動を大阪ではじめたNGOです。生活環境の上で水インフラが整っている日本から1杯の飲み水さえも得ることが困難であったインドの人たちの生活の場に井戸を設置することから日々の生活を改善し、その地域を現地の人たちと日本との理解と協力と連帯によって、住みよい地域に改善していくことを目指してはじめました。その後、ネパールとフィリピン、そして、アジア18カ国にネットワークを広げ、「誰もが生まれて来てよかったです」と思える社会の創造を目指し国際NGOの一つとして成長してきました。

井戸の建設

第1号の井戸はインド マハラシュトラ州ナグプール市ググリー村に建設しましたが、井戸が出来たことでその周囲に家や商店が出来てコミュニティーが形成されました。またフィリピンのパナイ島では塩が混じった水を長い間飲まなければならなかった地域に水道パイプラインを敷設し、地域全体に安全な水が行き渡ることにより、大きくその地域が変化することを実感しました。それに続く地域づくりを行うために45年の活動の中で、13か国に2301基の井戸を贈ってきました。近年、地球温暖化により世界の水の状況が危機的にあることは周知のことであるかと思います。私たちの活動地域の一つであるインドカルナータカ州ではここ毎年過去最悪の旱魃といわれる状況です。これまで掘った井戸も涸れてしまい、更に深く掘削しなければなら

ない状況となっていると報告が来ています。同時にこれまで予算がないことで、手を付けられていなかった水道設置が、法整備や予算確保で国や地域で実施されるようになります。しかし、貧困格差が拡大する中で都市部では、水道代が払えず下水を生活水に使うような状況の人々もいます。

大切な「水」と「栄養」

「水」は、私たちの命を司る資源です。生きていくために必要である、生活を安定させるためにも必要です。同時に人々の健康や栄養にも関係し保健のために衛生で安全な水は欠かせません。私自身、管理栄養士の資格を持ち栄養調査およびその後の栄養改善事業がきっかけにNGOの活動にかかわることとなりましたが、食事の内容の改善よりもまずすべきことは水環境の改善でした。1991年当時、調査に入った村には数えるほどし



写真1：インドに設置した第1号井戸



写真2：インド 現在の水支援の状況



写真3：水の課題 水道代を払えないスラム街の子どもが下水より水を汲む様子（ネパール）

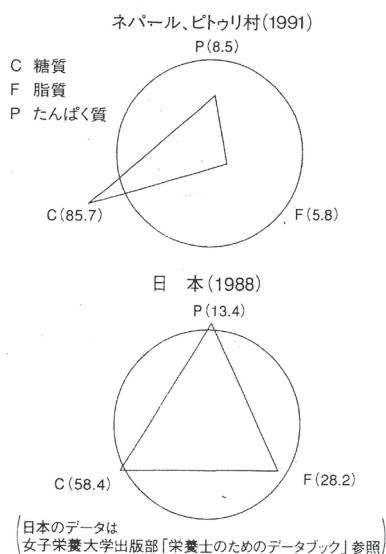


図1：エネルギー構成図

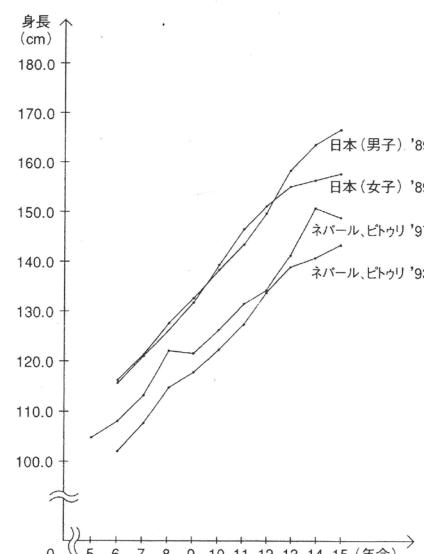


図2：身長比較グラフ

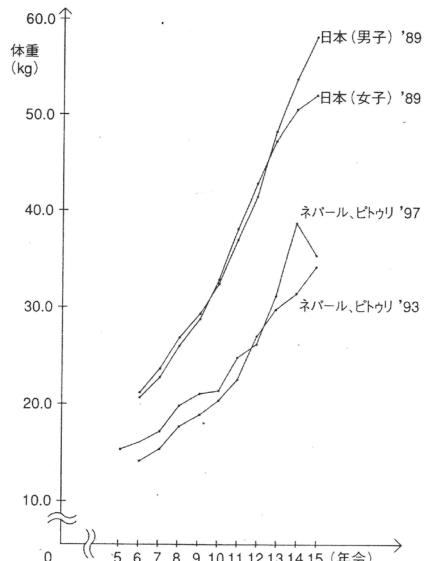


図3：体重比較グラフ

か井戸が無く、乾季には水位が低くなるので人々は水の量を気にしながら日々生活を行っていました。そのため、川やため池、用水路の水を併用して生活しているので子どもたちは頻繁に下痢をしていました。また、子ども全員が回虫や蟻虫を保有している状況であったため、その状況を改善するためにはまずは水の改善が優先でした。その当時、栄養摂取状態はバランスが悪い（図1参照）と同時に私が実際に子どもたちの身長や体重測定を行い、当時の日本の子どもの平均値と比較したグラフが図2、図3ですが、大きな違いがあることがわかると思います。同じモンゴル系人種が多い国同士で大きな差が生じているのは、生活の上での水環境の違いが健康や栄養へ影響していることが明確でした。

その地域での水環境の改善のためにあちらこちらに共同井戸の設置をおこない、同時にたんぱく質を補うための牛乳と卵の学校給食を週1回始めました。その給食活動は今現在も続けており、数年前から開始された政府支給の学校給食に週に1回卵と牛乳を加えてたんぱく質補給を行っています。おかげで健康的で学校生活に意欲を持つ子どもが増加しました。しかし、依然として、身体に何かしらのアンバランスや健康問題があると同時に学習意欲に欠ける子どもたちもいます。

その保護者たちをみると、私たちと共に改善策や教育を通して自分自身が栄養改善のプログラムで健康と食べ物の関係を学んだ卒業生の子どもたちは、前者（改善している）の状況の子どもが多く、天災や洪水の影響で違う地域より移ってきた世帯の子どもたちには、後者（健康や学習意欲低下問題）の状況が比較的よくみられます。元々同じような経済状況の中でも、どのような活動の中に身を置いて過ごしてきたのかが、積み重なって生活や子育てへの向き合い方に開きが出ていていることを感じています。それは私たちが長年実施してきたことへの効果と確信できる時もありました。しかし、上記のように子どもの栄養課題はあり、改善状況はよくありません。国全体をみても取り残されている子どもは多くいます。また、食生活の変化で他の課題も加わってきています。

人材育成

創立時期から比べると、アジア全体の水環境が大きく改善されはじめ整いつつあるなか、水という視点から保健をみて、子どもたちの栄養状況の改善を根本的に行うために、栄養学を専門的に学んだ現地の人達が現地の課題改善に専門的に関わる、いわば日本の栄養士のような制度が現地に出来る事が必要だと考え、ネパールの栄養学

科卒業生を日本の栄養士育成過程を学んでもらっています。

これまで外部からの支援により問題を解決することがあり前、発展途上国ではその国人達の多くは支援を受けることが当たり前、先進国は支援をすることが当たり前の社会でしたが、これからは経験値の高い制度について学んでもらうことから、お互いが持続可能となって行くことが必要だと思います。人を育て制度をつくることは、井戸を一基掘り、贈るよりも遙かにお金も時間もかかることです。しかしながら、これから共生の社会、持続可能な社会をめざす役割の一つとして、大変重要な役割となって行くのではないかと考えます。

一滴の水が人々の命を守って来た支援から、社会の仕組みに組み込まれる支援により、「水」から人々の健康と生活を守る活動を推進していきます。



写真4：給食を楽しく食べる子どもたち
しかし栄養バランスがとれたメニューではない